

優良案件例

トルコ「カマン・カレホユック考古学博物館建設計画」 (一般文化無償資金協力(4.36億円)2007年6月～2009年4月)

この計画を通じ、トルコの首都アンカラの南東約100kmに位置し、東西南北文明の交差点に位置するカマン・カレホユック遺跡の出土品を保管・展示するための施設を建設しました。この遺跡では、1985年(昭和60年)より(財)中近東文化センターが発掘調査を行っていましたが、付近に適切な施設がなく、出土品は遠方の複数の博物館にバラバラに保管・展示されていました。そこで、遺跡近くの施設にまとめて保管・展示するためにトルコ政府より日本に対し支援要請があったものです。

カマン・カレホユック博物館は、三笠宮寛仁親王殿下(当時)を募金委員会委員長として日本全国から集められた寄附により建設された(財)中近東文化センター附属アナトリア考古学研究所や日本庭園「三笠宮記念庭園」の隣接施設とともに一つの文化施設複合体を構成し、現在、日本を中心にトルコや欧米各国を含めた国際的な文化・学术交流の場となっています。



博物館・研究所全景



博物館入口

この博物館では、日本の専門家による指導を含め、研究者、博物館関係者に対する研修やシンポジウムをアナトリア考古学研究所と共催するなど、人材育成や、学術・研究面の活動を活発に行っており、トルコ政府関係者、研究者、国内外発掘調査隊のみならず、子供達を含めた多くの地元市民やトルコ各地からの大学生、日本人観光客を含む観光客など、昨年は約6万人が来訪し、日・トルコ文化協力の象徴的存在となっています。

特徴的なのは、大村幸弘所長の下、アナトリア考古学研究所の継続的な協力を得て、地元児童を対象とした考古学に関する授業や地元住民による各種イベント(「女性の日」「子どもの日」等)が開催され、地域に根付いた施設として、連日地元民で賑わい、地元民が

この博物館に誇りと愛着を持つようになってきている点です。



女性の日（博物館内）



来館者に対する大村所長の解説

トルコ政府も博物館建設時から館内の機材整備を行うなど、博物館への支援を継続しています。更にこの博物館が世界遺産のカップドキア遺跡と首都アンカラの中間地に位置することもあり、道路整備を始め、観光面を含む地域開発にも取り組んでおり、地域の経済・社会開発面への効果が出てきていることも特筆に値するものと思われます。

このように、カマンにおいて、日本の官民が連携した「顔の見える」協力は、トルコ政府、地元自治体、住民などの積極的な参画により、日・トルコ間の交流促進、親日感情醸成にも大きく寄与するものとなっています。

(写真提供：(財)中近東文化センター附属アナトリア考古学研究所)